

戦国大名の古文書

西日本編

◎伊予(愛媛)

令和四年五月十日(火) 於わくわく集会室一

加藤嘉明書状

其後、不得貴意、「御床敷存候刻、」幸便悦入、令啓候、「誠久々不能
面拝候、「無音背本意候、「然者 侍従様」思召寄、魚住半右衛門尉殿、「
爰元まで被仰下、「忝儀、とかく可申上」様無之候、拙者事、「御内の
くし儀に」御座候へ、か様に可被成「儀にて無御座候、「還而致迷惑候、「
御次之刻へ忝存候」通、被仰上、可被下候、「頼入存候、自然伏見」罷
上、在之候節、御上洛」候者、可預御尋候、相積」儀はなし申度候、
何事も期面上候間、「不能細筆候、恐々」謹言

加左馬助

(慶長九年)正月廿二日

茂(花押)

兼又四様

人々御中

【大意】その後は、手紙も交わさず床しく思っていたところ、幸便があり手紙を認めました。久しくお会いせず、無音は本意では有りません。そこで侍従様(松平忠吉)の好意によりこちらまで魚住半衛門尉を遣わされ、忝く、こちらからは申し上げることもありません。私どもは身内の公事の件でいそがしいので、それは無理です。むしろ迷惑です。次の機会があれば、私どもを誘うように侍従様にお伝えください。伏見に上洛し、居る間に侍従様が上洛あれば、訪ねてください。積る話もあります。

- ★幸便 ○都合よく便りのついでのあること。○手紙を人に託すとき、書き出しやあて名のわきに書く言葉。
- ★面拝 お目にかかること。拝顔。面展
- ★侍従様 松平忠吉(家康の四男)。天正八年(一五八〇)〜慶長十二年(一六〇七)28歳。清須城主。慶長五年(一六〇〇)年、侍従に。清須城五十二万石に入る。九年五月頃から病氣、十二月に危篤に。十一年五月、知多半島で湯治するが、治らず、翌十二年、江戸に下向し、家康・秀忠と面会、数日後の三月五日藩邸で死去。秀忠は同母の兄。
- ★魚住半右衛門尉 魚住正近。松平忠吉(侍従様)の家臣。
- ★くし 公事。雑祝などのこと。
- ★加左馬助 永禄六年(一五六三)〜寛永八年(一六三一)69歳。秀吉・秀吉・家康・秀忠・家光に仕える。賤ヶ岳七本槍の一人。慶長の役の功労者で国持大名のチャンスだったが、秀吉の死去で頓挫。慶長六年、松山城二十万石へ。寛永四年(一六二七)、蒲生氏郷の死去により、家光は藤堂高虎を考えたが、高虎は、不仲の加藤を推挙した。これは国事なのだから加藤が適任と説得し、以後、高虎と加藤は水魚の交わりの付き合いをしたという。加藤は、会津四十三万石を継ぐ。なお、三男・加藤明利は三春三万石を賜り、女婿・松下重綱も二本松に配されて、嘉明の与力とされた。
- ★兼又四 兼松正吉。侍従様松平忠吉の家臣。